

## 自由な私を探して

浜田 紀子

いつ私が大阪文学学校を意識したのか判然としないが、福井から大阪に出てきて、数年たった頃、大阪文学学校に関する新聞の切り抜きが、古いノートの間から出てきた。

当時私は結婚したばかりで、寝たきりの夫の母と、はいはいを覚えた赤ん坊を抱え、気の抜けない生活をしていった。

娘は寝ている義母をはいはいで乗り越えては、自慢そうに満足そうに声上げて笑った。義母は孫娘が布団からころげ落ちないよう、感覚が残る左手で、懸命に服を掴んだり、足首をつかんだりしていた。心に残る光景だったが、洗濯物は山のように出るし、離乳食も介護食も必要だった。そんな生活の中に、切り抜きがはらりと畳に落ちた。高校生の頃、私は漫然とジャーナリストになりたいという夢を持っていた。切り抜きを見た途端そのことが甘酸っぱく思い出された。夢とつながる何かがそこにあるんじゃないか、と違って、新聞広告を切り取ったのだろう。

ほんの数年前、私はこんなことを考えていたのか。夢と現実の生活とのギャップにめまいがした。見てはいけないものを見た気がした。落ちたものを見つけ、娘が突進してきた。その好奇心に満ちた目は、私を瞬時に現実の生活に引き戻し

た。

それから十五年、私は三人の子供の子育てに、ほとんどの時間を費やした。PTA活動もしたし、子供に添加物の少ない食物を食べさせたいと、生協活動も頑張った。なのにどうしてだろう。末の息子の小学校入学が見えてくると、私の心はざわついた。三十七才という年令がやたらに気になった。

大阪文学学校の新聞広告が大きく見えた。文学学校が何を教えるところなのか全然わからなかったが、「文学」という文字の中に、「自由な私を探す」「自由な私を確認する」という意味が遠い灯火のように揺れて見えた。末の息子が小学校に入学した昭和五十二年の春、私も大阪文学学校の通教部に入学した。

校長は小野十三郎さん、副校長は港野喜代子さん、事務局長は川崎彰彦さん。本科のチューターは高畠寛さんと井上俊夫さんだった。初めてのスクーリングには全国各地から大勢の人が集まっていた。私も大和八木駅から一人電車に乗った。一人で電車に乗るのは何年ぶりだったか。上本町まで三十分なのに、遠くへ旅立つ気分だった。頬にあたる風が、夫や子供といえる時とは違って、ひりひりすると思った。文校のテー

ブルの周りに座った人々をみんなも何かを求めて一人でここにたどりついたんだ、と自分と重ねていた。合評会では気遅れして黙っていたけど、その後の飲み会では元気だっただろうと思う。あの日、私は父に似ていくらでもお酒が飲めることを知った。

私は今年七十七才になった。大阪文学学校に入学して、四十年の歳月が流れた。文校の記憶も大分あやしくなってきたけれど、思い出せば心は暖まる。

入学当時、文校の部屋の目だつ所に、「なぜ書くのか」と大きな字で横書きした紙が張つてあつた。あんまり真つ正面から聞かないでよ。私は見ないようにしていた。

スクーリング毎に、校長も事務局長も文校は出会いの場だ、といった。遠くから一人で文校にたどりついた人達は、なにかありそうで、親しくなりたかつたけれど、次のスクーリングにはもう来なかつた。昼間部、夜間部の人たちは生徒会を作り、生徒会長もいる、親睦のハイキングもする、ときいて羨ましかつた。通教部は出会う回数が少なく、仲間がどんなものを書いていられるのかも、スクーリング用の文集が送られてくるまでわからなかつた。そんなことを考えている時、隣に座わる井上俊夫さんに、どんなものを読んできたか、と聞かれた。私は高校時代、一応文芸部に所属していて、トルストイの「アンナ・カレニナ」、シヨロホフの「静かなドン」、イプセンの「人形の家」マーガレット・ミッチェルの「風と共に去りぬ」などを読んでいた。しかし結婚して十七年、新

聞以外、本を読んだことがない、といった。

「女の人は、どうしてもそこで途切れるよな。ここに来たらいうことは又始めるんやろ？ならアンダスの『ワインズバーク・オハイオ』読んでみ」

「どうしてもそこで途切れるよな」に私が通り抜けてきた生活への、理解と共感を感じた。「又始めるんやろ」に道を示され、励まされていると思つた。そう、私は又始めるのだ。

しかし意外だつた。井上さんは軍隊を体験した、いかつい感じの人で、こんな柔らかい反応をしてもらえるとは。「ワインズバーク・オハイオ」と「アンダス短編集」は私と歩く大切な愛読書になつた。

専科・前期のチューターは北川莊平さんだつた。大きな目を見開き、洪い声でスクーリングの合評会を圧していた。いつも酒の匂いがしていた。

「たまには飲んでない北川さんに会いたい」といったことがある。

「あほか。素面の俺の傍に、あんたなんかおられん」

といわれても私はひるまなかつた。北川さんの作品評は鉛筆がきの楷書で、二百字詰め原稿用紙のます目に、きちんと収まっていた。そこにはまだ四十代の北川さんの几帳面さや、常識を破れぬもどかしさが滲んでいた。シャイな人だと思つていたから。後に北川さんと同人誌の仲間になつたが、例会の後の二次会で、北川さんが発した言葉が、今も私を律している。

「作品に一つの間違ひは許す、二つも我慢する。三つになつ

たら、俺はもう読まん。その作家を信用しない」

専科・後期のチューターは竹内和夫さんだった。返ってきた作品評に「あなたの作品は書きっぱなしである。あなたの言いたいことを伝えるには、自分の書いたものをよく読み返し、読みやすく、わかりやすくする作業が必要です。これを推敲といいますが、少しやってみましょう」とあった。そして作品のあちこちに赤鉛筆で傍線が引いてあった。「ありふれた言葉。別の言葉に置きかえて。」「ここは取る」「ここはもっと詳しく」「この時『私』はどう思ったかを書く」と指摘が続く。文校で、私はこれが教えてほしかったんだ、と推敲にのめり込んだ。自分の作品が変わっていくのを目を見張った。

私が文校の生徒として書いた最後の作品は、駅で出会った浮浪者の話だった。それなりに推敲したのに、又文集に載せてもらえなかった。スクーリングの二次会で、ビールのコップを持って竹内さんが近づいてきた。

「あの作品、ちょっと手入れて『新文学』に送り。あんた卒業やろ、記念や。書きなおしたら僕とこに送って。もう少し見てあげる」

ちよつと、と竹内さんはいったが、十回は書きなおした。あの時私は竹内さんに鍛えられたのだと思う。ひとの作品を見る目もすっかり変わった。私は昼間部、夜間部に通える人を羨ましく思っていたけれど、作品評を文章でもらえる通教部もいい、と思うようになった。

悪戦苦闘した作品は「新文学」に送った。文校の事務局長は松田伊三郎さんに代わっていた。松田さんがこの作品をどう思ったか、直接聞いたことはないが、次の作品を早く書くよう奨められ、間をおかず二作載せてもらった。これはきつと破格のことだ、もう道はきめられた。書いて行くしかない、とふるいたったものだ。私もまだ若かった。

後にしばらく文校のチューターをした。竹内さんにももらったものを、少しでも返したい、と背のびして受けたけれど、これは全然無理だった。思い出すことはもう私のからだの一部になっていて、七十七才の私はその思い出に支えられている。